

第7章 コミュニケーションにつなげる条件英作文

1. 指導の背景

1) 海外におけるライティング指導の流れ

[1950年代～60年代]

オーディオリンガル・アプローチ(Audio-Lingual Approach)の全盛期で、音声を中心。ライティングは口頭練習をした文型を定着させるための副次的存在で、制限作文(controlled composition)中心でプロセスよりプロダクトに焦点。

[1970年代]

Writing for learning から writing for communication へ。プロダクトよりもプロセスを中心にした学習者中心のプロセス・アプローチ(Process Approach)。(現在のライティング指導法の主流。)母語での作文教育が背景にある。

[1990年代]

情報化社会の進展によるインターネットの普及、電子メールでの外国とのやりとりなどコミュニケーション活動につながるライティングへ。

2) 日本の学校教育におけるライティング指導

1947年(昭和22) 戦後初の『学習指導要領英語編(試案)』(大村 他, 1980; 戦後教育改革資料研究会, 1980): 作文は文法と同じ教科書で扱われ、文法を学ぶためのもの。

アメリカ構造主義の影響で文法や文型重視。

1978年(昭和53) 高等学校で、書くことに特化した「英語ⅡC」が設定されたが、依然として文法中心。

↓

1980年代後半 コミュニケーション能力育成が目標に。

2004年(平成16) 改訂版「ライティング」の教科書では、文法シラバスを基本に編纂されているものの、言語形式より伝達形式に重点。

2008年(平成20) 学習指導要領に対する答申では、四技能をバランスよく指導することが示され、また「ライティング」「リーディング」が消え、「コミュニケーション」が基本になった新しい科目を設定。

⇒ コミュニケーションを意識し作文指導の必要性

3) なぜ条件英作文か

「コミュニケーション活動につなげる」 → 「自由作文」×

日本語でさえ容易ではないため、多くの生徒にとってハードルが高い。

高校生レベルでどこまで行うべきか不明。

添削指導に対する時間的問題。

↓

コミュニケーションにつなげること意識した条件英作文

従来型の制限作文ではなく、誘導作文(guided composition)に近いもの。

学習した文法項目の定着には役立っても、こういった場面やコンテキストで用いるのかが分からなかった従来の方法ではなく、条件の出し方を工夫し、生徒の創造力・想像力を刺激することができる。

2. 指導の実際

実際にどのような「条件」が考えられるか。

1) プラス1の要素を組み込む

例) 助動詞 **can** を用いた作文にプラスで一文書き加えるように指示。

→メッセージ性が高まり、**can** を「できる」という日本語に置き換えるだけでなく、イメージを膨らませることができる。

例) 「仮定法」 I were A , I would/could B . A と B に自由に語(句)を書かせ、さらに数文続けて書かせる。

→生徒の多様な自己表現が反映された作文になり、仮定法をどのような場面で使うのか、どのような気持ちが込められているのかを実感することができる。

例) If I were won 100 million yen in a competition. という同じ条件節を与えて、続けさせる。

→同じ課題を与えても生徒が自由に書く余地があると、自己表現につながる作文が生まれる。

*フィードバックの工夫

- ・数人の作文を選び、クラス全体にフィードバックすることで、互いの発想の違いに気づいたり、選ばれようという動機づけにつながる。
- ・添削は最小限にとどめ、内容に関して共感や励ましのコメントや質問を英語で書いて「読んでもらった」という満足感を与える。
- ・形式面の間違いはクラス全員に説明すれば、問題点の意識化と共有化ができる。

2) 使う単語のリストを与える

例) 生徒に単語リストを与え、そこから自由に3語選んで話をつくる

→3語を関連付けてメッセージ性のある内容にするには、一文では不十分であり自然にアウトプットが増えることになる。(作本例:p110)

※与える単語の数は10語前後が適当で、クラスの状況で判断。単語リストは学習した単語であれば、復習にもなり使い方も学習できる。

[感想]

英語教育の歴史的背景を見て、教育のあり方も時代のよって大きく変化することを改めて実感したことで、私たちもこれからニーズに応じた教育のあり方を見極めて行く必要性を感じた。また、本章の英作文の方法例を見て、一言に「英作文」と言っても様々な形があり、かなり意味のある方法だと感じた。しかし、例文を見て感じたことはここまで書ける生徒はそう多くないということである。筆者は添削の際に、文法的視点よりも内容へのコメントが重要だとしているが、それはあくまでも基礎が固まった生徒に言えることである。初めのうちは文法もバラバラで教師が理解できない英作文もあるはずである。これを踏まえれば、添削への教師の労力消費は避けられないものであり、それこそが大きな課題ではないかと思う。